

自由応募分科会 4 「アジア太平洋秩序とチャイナ・ファクター」

司会 黒柳米司（大東文化大学名誉教授）

報告 1 浅野亮（同志社大学）

報告 2 平川幸子（早稲田大学）

報告 3 阿部和美（早稲田大学大学院博士課程）

討論 吉野文雄（拓殖大学）

1. 巨大な疑問符としての中国

中国がいかなる位置を占め、いかなる役割を果たしてきたかの問題――つまり「チャイナ・ファクター」――は、アジア太平洋地域にとって戦後一貫して巨大な疑問符に他ならなかった。アジア太平洋地域の戦後史を概観すると、「チャイナ・ファクター」が時代を規定してきたといっても過言ではない。単純化のそしりを恐れずに言えば、アジア太平洋の戦後史は、「中国脅威論」に特徴づけられる冷戦期、「対中和解論」が機能したポスト冷戦期、そしてごく短い「対中提携論」が射程に上った中国台頭期、そして最近の（形成途上の）状況としての米中対峙期として特徴づけることができる。

2. 不即不離の補助線としての ASEAN

アジア太平洋秩序における巨大な疑問符としての「チャイナ・ファクター」といわば対をなすのが、弱者の連合体として独自の存在感を発揮してきた ASEAN である。弱者の常として ASEAN 諸国は、米ソ中という諸大国の意向と動向とに敏感たらざるを得ない。自ら主導的にこれらの大国に働きかける力量を欠く ASEAN としては、いわば「弱者のイニシアティブ」を発揮すべく、これら諸大国の敵対・牽制・対峙という錯綜した状況を味方につける必要があった。

3. 「米中対峙」時代の中=ASEAN 関係

21 世紀に入って疑問の余地なく地域的潮流となった「中国の台頭」という現象は――「米中対峙」という状況を顕在化させつつ――いまやアジア太平洋秩序を規定する主要な局面となった。本分科会の目的は、中国=ASEAN 関係の構造と動態を検証することを通じて「米中対峙」という時代状況の理解増進に資することにある。一つの焦点は習近平政権の政治経済戦略が米中対峙状況にいかなる運命を与えつつあるかの検討であり、もう一つは「一帯一路」戦略や「AIIB」などの中国の政策が ASEAN に与えるインパクトおよびこれに対する ASEAN 諸国の対応を明らかにすることである。